

# 波 資料紹介 (八戸市博物館所蔵)

## 一、八戸市指定文化財

はちのへししていぶんかざい  
はちのへししていぶんかざい  
せいそうさいむねあり けいおう  
刀 銘「精壯齋宗有／慶應二年二月日」 棕櫚蠟色研出刻鞘打刀拵付き  
しゅろういろとぎだしきざみざやうちがたなこしらえ



\*長さ 80.5 cm

## 一、伝 八戸藩九代藩主南部信順所有

なんぶのぶゆき  
刀「無銘 (伝 助宗)」 脇差「無銘 (伝 貞宗)」 黒呂色塗枝菊文螺鈿鞘大小拵付き  
すけむね さだむね くらろいろぬりえだきくもんらでんざやだいしょうこしらえ



## 一、伝 剣客 築田平治遺愛

やなた へいじ  
刀 銘「武州下原住廣重」 黒塗鞘打刀拵付き  
ぶしゅうしもはらずみひろしげ

\*築田平治は、超人的な剣の腕前を持つ八戸の剣客で、少年漫画の主人公のような逸話が多数残る。一方、藩の記録としては祖父と孫の関係で二人の藩士「築田平治」が実在している。なお、この刀がどちらの遺愛刀かは不明。



\*長さ 70.1 cm

## 一、刀 銘「應八戸藩中里幸環好 於江府精壯齋宗有作之

でんまちょうりょうくろまどたんばらい  
／文久二戌年八月日 同年於傳馬町 両車土壇拂 十月七日 切手 後藤新太郎



\*長さ 99.6 cm

## 一、赤羽刀 (太刀) 銘「比津賓新建國乃日 果作 昭和十八年十月四日

くしひきはちまんぐう さんのへぐんむかいむらおむかい  
／奉納 櫛引八幡宮 三戸郡向村大向 工藤勝衛



\*長さ 68.3 cm

# きれもの伊呂波 ～日本刀のこと～

## 伊 日本刀の歴史

にほんとう たち かたな わきざし たんとう けん なぎなた やり  
日本刀には、太刀・刀・脇差・短刀のほか、剣・薙刀・槍といった種類があり、その姿形は

時代の流れと共に変化してきた。

反りのある日本刀は、平安時代中期以降に成立したとされる。それ以前は蕨手刀などの反り

のない直刀 (上古刀) で、鉄の鍛錬技術と共に大陸から伝えられた。当時、大陸様式の直刀は

斬ることよりも突き刺す用法に特徴があり、その戦闘も徒歩によるものだった。平安時代末期、

戦闘の様式が騎馬に変わると、反りのある太刀と弓矢が最大の武器として威力を発揮した。

鉄砲の出現により再び戦闘が徒歩戦に移行すると、太刀は次第に廃れ、腰に帯びる反りの少

ない打刀 (刀) が流行し、江戸時代の大小差 (刀と脇差) にまで発展する。その後、明治・大正・

昭和といった時代の移り変わりを経て、日本刀の伝統は現代まで続いている。

鎌倉時代、大和・備前・山城・相模・美濃の5ヶ国を中心に、のちに「五ヶ伝」と称される

刀工の流派が生まれた。これらの技法を学ぶために全国から修行者が集まり、修行を終えた者

が故郷へ技法を持ち帰ることで、各地に技法が広まった。異なる技法をあわせることで新しい

技法も生まれ、現代に至るまで、全国各地にさまざまな刀工の系譜が成立している。

上古刀【じょうごとう】古刀以前の、反りのない直刀。

古刀【ごとう】慶長年間 (1596～1615) 以前のもの。

新刀【しんとう】慶長～文化・文政年間 (1804～1830) 以前のもの。

新々刀【しんしんとう】文化・文政年間以後のもの。復古新刀とも。

現代刀【げんだいとう】廃刀令以後～現代までのもの。

刀装【とうそう】刀身の装具。太刀と打刀の拵 (こしらえ) がある。

三所物【みどころもの】同一作者でそろえた小柄・拵・目貫の3点。

姿【すがた】反りや厚み・幅などの、刀身の形のこと。

刃文【はもん】焼き入れの工程で出来る模様。見所の1つ。

地金【じがね】焼き入れをした刃以外の部分。

鍛え肌【きたえはだ】地金の模様。流派や産地によって異なる。

\*日本刀から生まれた言葉の一例

「切羽詰る (どうにもしがたい差し迫った状態)」

→ 切羽とは、鐔の両面に添えられる薄い金具。

鯉口と鐔の間、鐔と鍔の間に挟まって動かない状態にある。

「あいづちを打つ (相手の話にうまく調子を合わせること)」

→ あいづち (相槌) とは、鍛冶職人が刀を鍛える時に、

2人で交互に槌 (たたき道具) を打ち合わせること。

【写真】和漢三才図会 第21巻 兵器類 (当館蔵)

わかんさんさいずえ だい21かん へいきるい

江戸時代の百科事典『和漢三才図会』には「刀は剣に似ているが両刃ではない。それで和名は片刀 (かたな)。今の刀は太刀と異なる。但し、佩く (はく) と挟す (さす) との異があつて、鞘が同じではないだけである」とある。

「おとり刀」という言葉がある。響きからは随分のんびりした印象を受けるが、漢字では「押取り刀」。刀を差す間も無く手に持ったまま駆けつけるほどの非常事態、大いに急ぐ様子を表す言葉で、実は全くのんびりしていない。

## 用語解説

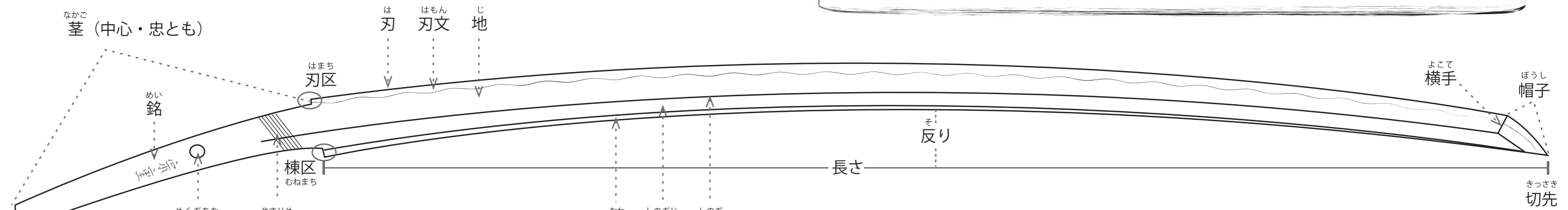


# 鑑賞の手引き

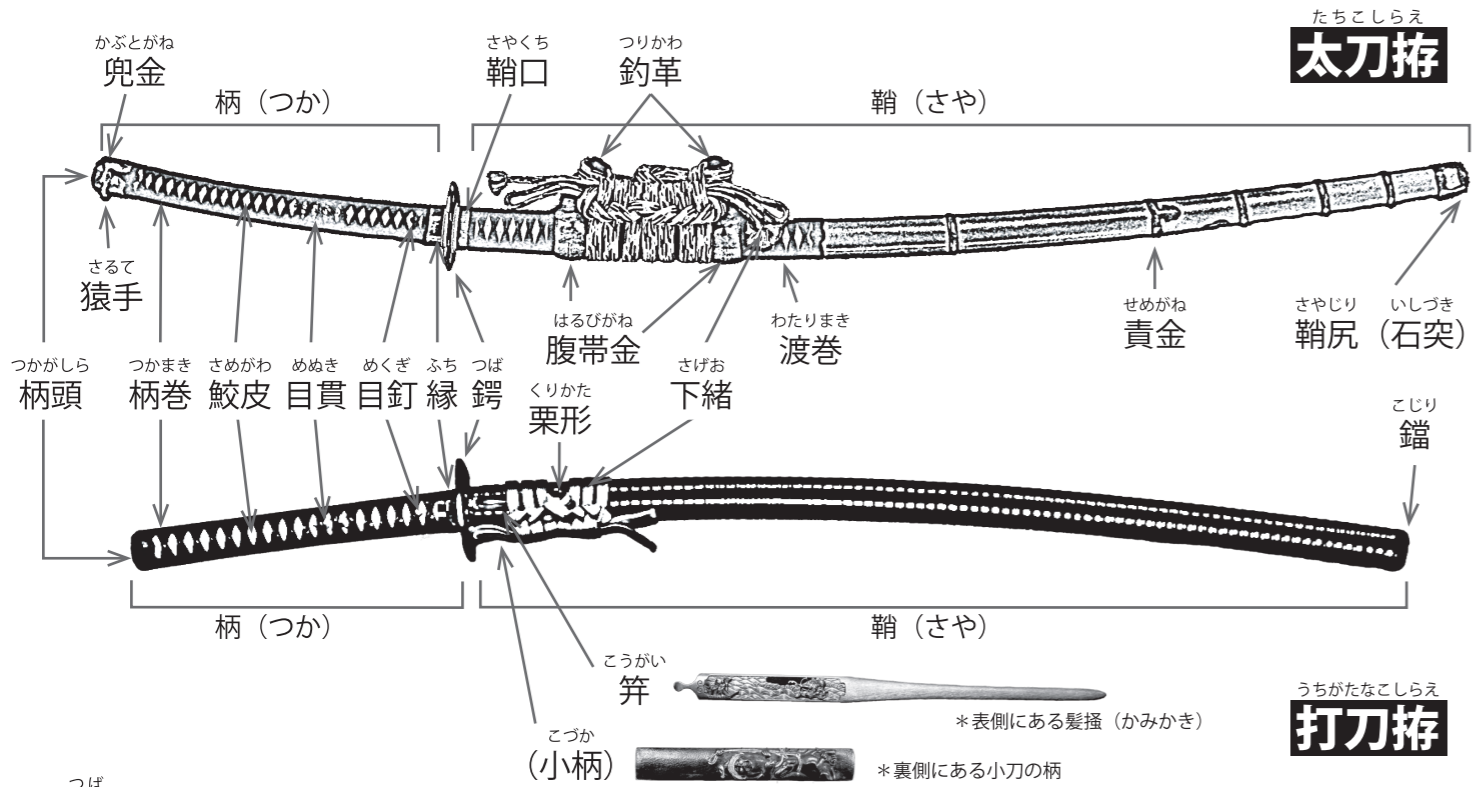
とうこう ときし ほりし  
 刀工、研師、彫師、鞘師、鐔師など、多くの職人が関わって完成する日本刀は、部分ごとにそれぞれの意匠や技の粋を見ることができ、さまざまな角度から楽しむことができる。

かつて、各地の城下町には鍛冶職人がおり、藩に召し抱えられる専属の刀工もいた。八戸藩の城下町にも鍛冶職人が多く居住する「鍛冶町」があり、この地名は現在でも残っている。城下町だけでなく領内に多数の鍛冶職人がおり、郷土の刀工が藩へ刀を献上していたようで、八戸藩『目付所日記』には鍛冶職人の小笠原権平が江戸に修行へ出向く旨が記されているほか、藩主の『御腰物帳』にも「奥州八戸住吉貞」などの銘が記されている。

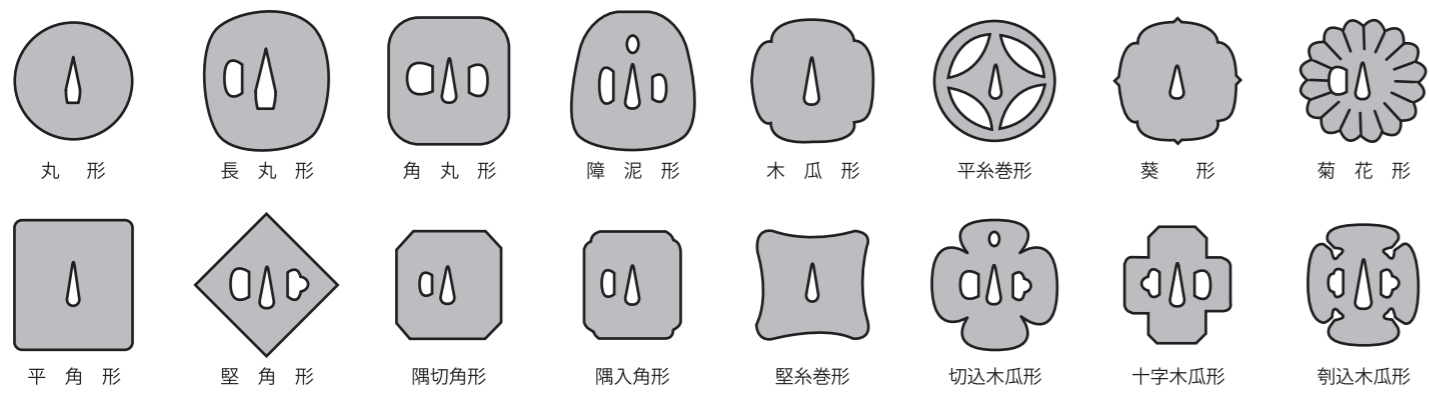
幕末期、八戸藩士たちの人気を集めたといわれるのが、葛巻村（現・岩手県）の鈴木次郎（精壮斎宗有）で、江戸の青山に居住した。文久元年頃からの作刀が多く、当時流行した長寸で豪華なものが見られ、試切銘が入るものや注文打もある。宗有の門人となった小久慈村（現・岩手県）の柏木源吉（精光斎宗重）は、江戸から帰郷して作刀していたが、時代が明治になると作刀の機会も無くなり、やがて農具の製作を仕事にしたという。



- \* 2尺（約60センチ）以上=太刀・刀
- \* 2尺～1尺（約60～30センチ）=脇差
- \* 1尺（約30センチ）以下=短刀
- \* 1尺=10寸=100分=1,000厘
- \* 1尺≒30.3センチメートル



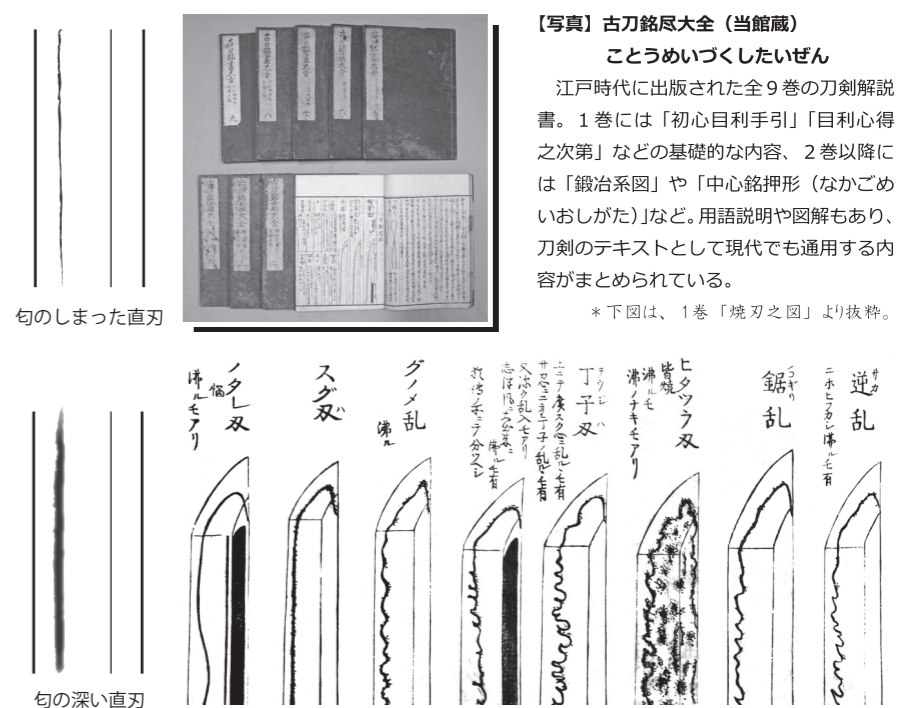
## 鐔の形状



## 刃文

刀身に生じた模様のこと。刃文と地の境目に現れる粒子の粗い部分を「沸(にえ)」、肉眼ではとらえられないほど細かい部分を「匂(におい)」といい、作風により「沸出来」「匂出来」と表す。

刃文は、焼刃土(やきばづち)という粘土性のものを荒仕上げした刀身に塗り、へらを用いて刃の部分だけ土を薄く落とす「土取(つちとり)」の工程で形が決まる。この土取の土が乾いたところで炉に入れ、刀身の焼加減を見て水槽に入れる「焼入れ」により、刃と地の硬度の差で模様が生じる。焼入れは、刃を丈夫にするための工程であり、最も技量を要する大切なもの。

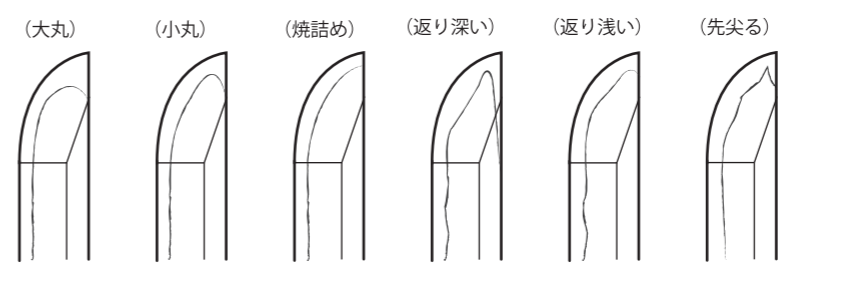
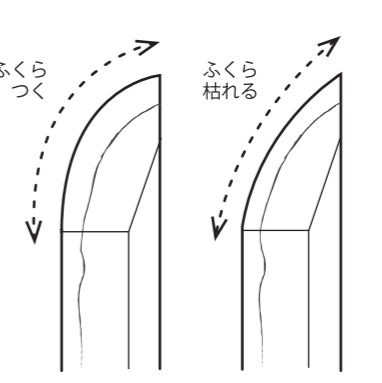


【写真】古刀銘尽大全 (当館蔵) ことらめいづくしたいぜん  
 江戸時代に出版された全9巻の刀剣解説書。1巻には「初心目利手引」「目利心得之次第」などの基礎的な内容、2巻以降には「鍛冶系図」や「中心銘押形(なかごめいおしがた)」など。用語説明や図解もあり、刀剣のテキストとして現代でも通用する内容がまとめられている。  
 \* 下図は、1巻「焼刃之図」より抜粋。

## 帽子

刀身の先端部分(鋒・きっさき)のこと。刃のカーブを「ふくら」と呼び、大きく膨らむものを「つく(張る)」、直線的なものを「枯れる」という。

帽子の形や刃文には、個々の刀工や各時代の特徴が表されるため、大事な見どころの1つ。



## 鍛え

鋼そのものの材質と、それを折返し鍛錬することによって生まれる、樹木のような肌目の模様を総合したもの。一番多いのが「板目肌」。鍛え目がはっきり出ているものを「肌が立つ」、細かく密着しているものを「肌がつむ」という。

